

# 「東松峠（県道別舟渡線）」を考える

## 「歩く道」を考える

福島県内には車が通れない県道がいくつかあり、建設事務所では、これらの道をどう管理し、使っていくかを課題としています。

その中の一つである東松峠は旧街道の面影が今に残る道であり、その道を地域の人たちが自ら管理し守るといった先進的な取り組みを行なっている所です。

私たちは、地域の皆さんとともに考えながら、「歩く道」としてのあり方を探り、旧街道の保存、活用に取り組んでいきたいと思っています。

## 越後街道と東松峠

越後街道は、会津五街道の一つで、若松札の辻から越後新発田に至る行程二十三里余（約92 km）の道です。中世以前は東松峠の北、勝負沢峠、塩峯峠を越え野沢に通じていましたが、慶長十六年（1611）の会津大地震によってこの道は不通となり、以後東松峠経由になったと言われています。

明治十五年（1882）、会津三方道路の建設が始まり、越後街道が藤峠経由になると、それまで荷物の輸送や旅籠として生計を立てていた人たちは、再びかつての賑わいを取り戻そうと峠に洞門を彫り、馬車の通行を可能なものとしましたが、完成後僅か十年にして不通となってしまいました。しかし、東松峠は軽沢の集落を抱えた高寺地区の生活道路として、また、街道の近道として、戦後になるまで通行する人は絶えませんでした。昭和三十五年、高寺地区が会津坂下町に編入され、軽沢の集落は西会津町に入ると、峠にあった二件の茶屋も相次いで天屋・本名に下り、東松峠は街道としての役割を終えることになりました。その後しばらく忘れられていた街道でしたが、昭和60年に地元有志の人たちによる保存活動が始まり、往時を偲ぶことが出来る街道が丹念に整備され、近年はウォーキングブームや歴史ブームもあいまって、多くの人を訪れています。



地藏茶屋跡の六地藏



東松峠の一里塚



峠の茶屋跡

## 東松峠保存活動の経緯

昭和60年、高寺地区の有志により「ふるさとを興す会」が結成され、東松峠の保存と顕彰に尽くす。

平成13年解散

「東松峠を護る会」がこれを引き継ぎ、現在も精力的に峠と街道の保存に取り組んでいる。



手入れの行き届いた旧街道

# 『歩く道』についての意見交換会を開催し、「東松峠を護る会」の皆さんから貴重なお話を伺いました。

平成21年11月13日（金） 天屋地区公民館

## ～ 東松峠の魅力を話し合いました～



### 自然

春から秋にかけて多くの種類の山菜がとれる。  
日本海型と太平洋型が混在し、亜高山の植物が植生している。

### 歴史

片門の地名の由来  
北条時頼が只見川を渡る時、霧が濃く見通しが悪く、その時に残した歌が片門、舟渡の地名の由来と聞いた。  
「船頭の、棹差し音は聞こゆれど、片角見ゆる船（ふな）渡しかな」

峠の茶屋では、かます（米一俵60kg入る）に天保銭がいっぱい入っていて、その上に上がったり、重ねて二階に上がったりした。

草鞋（わらじ）を履いた人の往来が多く、石畳の中央が摩り減っていた。

昭和9年ごろ、父と祖母が隧道の先で草を積んで帰る際、隧道を過ぎ、本名側で弁当を食べていると、ズーンという音がして、向こうの光が見えなくなった。

## ～ 東松峠のこれからを話し合いました～

### 活かし伝えていくには

現状の維持し、記録を残す。（くらしも含めて）  
分からなくなった山、尾根、谷、沢などの名前を調べ、残す。  
子供たちの教育の場として利用する。  
生きた博物館を作る。（部落公民館の利用）

### 隧道について

完全に通れなくても中の様子が見られるようにしたい。  
貫通させ人を通すには、土砂の崩落が心配。

枠（支保工）を作り、少し入れるようにする。  
入口の土砂を撤去するのに、その量、経費等を把握する必要がある。  
洞門の歴史、経緯などを記録し、案内板を立てたい。

### その他

吉田松陰の「遊（ゆう）日記」の掲示。  
山菜取りなどで入る車で道が荒れるため、その対策が必要となる。  
危険な箇所を整備したい。  
国土地理院で発行している地形図の「東松峠」の位置を修正してほしい。

これからも地域の皆様とともに「地域づくり」に取り組んでまいります。

ご意見・お問い合わせは



福島県 会津若松建設事務所

企画調査課（担当：瀧本）

TEL：0242-29-5455

FAX：0242-29-5459